

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	看護学分野
学籍番号		院生氏名	江口 晶子
通学キャンパス			
論文題目	市町村保健師による発達障害の特性をもつ子どもの保護者に対する支援技術の明確化－1歳6か月児健診後の継続支援が困難な状況に焦点をあてて－		
審査結果(枠で囲む)	合格		不合格
<p><審査結果の要旨></p> <p>1. 主論文について</p> <p>1) 研究の概要：本研究は、1歳6か月児健診後の継続支援が困難な発達障害の特性をもつ子どもの保護者に対する、市町村保健師による支援技術の明確化を目的とした。著者の先行研究(質的帰納的研究)をもとに、「発達障害の特性をもつ子どもの1歳6か月児健診後の継続支援が困難な状況における保護者支援技術<以下、支援技術>(暫定版)」を作成した。さらに2018年12月に公衆衛生看護学教員6名を調査協力者としたフォーカスグループディスカッションを実施し、支援技術の(原案)4領域45項目を作成した。この原案の妥当性について、実践現場の専門家である市町保健師の合意を得るためデルファイ調査を行った。全国1,535市町の行政機関の保健師経験5年以上の者で且つ発達障害児と保護者の支援実践ができる保健師1名の選定を依頼し、同意を得て郵送法による無記名自記式質問紙調査を行った。保護者支援技術の実践における妥当性を「大いに妥当」～「妥当ではない」の5件法で回答を求め、「大いに妥当」「妥当」を同意とし、同意率は80%に設定した。内容や表現に関する意見も収集した。調査は3回実施され、2019年1月475名、同年3月134名、同年9月128名から有効回答を得た。1回目、2回目の結果で合意率が満たなかった項目の修正と表現の修正を加え、3回目の調査によって85～100%の高い同意率のもと4領域45項目の支援技術が明らかになった。</p> <p>2) 研究方法、論証、論文形式の適切さ：本研究の実施にあたっては適正な手続きおよび倫理的配慮がなされていた。目的は支援技術項目の明確化であるが、支援技術ならば参加観察法によって暫定版の項目を抽出した方がより適切性があつたことも否めないこと、明確化にあたっては今後検証を進めるよう課題が示された。支援技術項目作成の方法において観察法を用いなかった事と今後の検証で観察の手法も取り入れることを研究の限界で述べられた。全体として論理的な記載と形式から学位論文として適切であることが確認された。</p> <p>3) 知見の新規性と価値：発達障害をもつ子どもに対する早期療育の必要性が唱えられている中で、1歳6か月健診後の母子の早期支援技術の質向上とその言語化が課題となっていた。本研究の新規性は、1歳6か月健診後の継続支援が困難な状況に焦点化し、全国の市町村保健師から合意を得て保護者に対する支援技術の明確化を行ったことである。今回は検証までには及んでいないものの、今後検証に向けての方策や、現時点での看護への活用について述べられている点も、看護学の発展に貢献するものと評価できる。</p> <p>2. 審査経過：審査会は1回開催しその際に研究目的と研究方法の整合性、構成概念の適切性、調査対象の設定理由、研究の限界、保健師実践(看護)への活用について加筆修正を求め、修正論文が適切に修正されたことを確認した。</p> <p>3. 口頭試問：口頭試問において適切に応答した。</p> <p>以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p>主 査 藤田 千春</p> <p>副 査 大池 美也子</p> <p>副 査 安立 多恵子</p>		